

※答えはすべて解答欄に記入すること

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。

近頃、パリに居る知人から、アレキサンダー・モスコフスキー著『アインシュタイン』^{注1}という書物を送ってくれた。「停車場などで売っている俗書だが、退屈しのぎに……」と断つてよこしてくれたのである。

欧米における昨今のアインシュタインの盛名は非常なもので、彼の名や「相対原理」という言葉などが色々な第二次的な意味の流行語になっているらしい。ロンドンからの便りでは、新聞や通俗雑誌くらいしか売っていない店先にも、ちゃんとアインシュタインの著書（英訳）だけは並べてあるそうである。新聞の漫画を見ていると、野良のむすこが親爺の金を誤魔化^{こまか}しておいて、これがレ^{注2}ラチヴィテイなどと済ましているのがある。こうなつてはさすがのアインシュタインも苦い顔をしている事であろう。

我邦^{わがくに}ではまだそれほどでもないが、それでも彼の名前は 以外の方面にも近

頃^{ひろ}だいぶ拡^{ひろ}まって来たようである。そして彼の仕事の内容は分らないまでも、それが非常に重要なものであって、それを仕^と遂げた彼が非常な優れた頭脳^{わが}の所有者である事を認め信じている人はかなり多数である。そうして彼の仕事のみならず、彼の「人」について特別な興味を抱いていて、その面影を知りたがっている人もかなり多い。そういう人々にとってこのモスコフスキーの著書は甚^{はなは}だ興味のあるものであろう。

モスコフスキーとはどういう人か私は知らない。ある人の話ではジャーナリストらしい。自身の序文にもそうらしく見える事が書いてある。いずれにしても著述家として多少認められ、相当な学識もあり、科学に対してもかなりの理解を有^もっている人である事は、この書の内容からも了解する事が出来る。

この人のアインシュタインに対する関係は、一見ボスウェルのジョンソン、ないしエツカーマンのゲーテに対するようなものかもしれない。彼自身も後者の類例をある程度まで承認している。「琥珀の中の蠅^{はえ}」などと自分で云^いっているが、単なるボスウェリズムでない事は明らかに認められる。

時々アインシュタインに会って雑談をする機会があるので、その時々^{まじ}の談片を題目とし、その注釈や祖述、あるいはそれに関する評論を書いたものが纏^{まと}まった書物になったというア^アテイサイである。無論記事の全責任は記者すなわち著者にあることが特に断つてある。

一人の談話を聞いて正当にこれを伝えるという事は、それが精密な科学上の定理や原則でない限り、厳密に云えばほとんど不可能なほど困難な事である。たとえば言葉だけは精密に書き留めても、その時の顔の表情や声のニュアンスは全然失われてしまう。それだからある人の云った事を、その外形だけ正しく伝えることによって、話した本人を他人の前に陥れることも揚げることも勝手に出来る。これは無責任ないし悪意あるゴシップによって日常行われている現象である。

それでこの書物の内容も結局はモスコフスキーのアインシュタイン観であって、それを

私が伝えるのだから、更に一層アインシュタインから遠くなってしまう、甚だ心細い訳である。しかし結局「人」の真相も相対性のものかもしれないから、もしそうだとすると、この一篇いっぺんの記事もやはり一つの「真」の相かもしれない。そうでない場合でも、何かしら考える事の種子くらいにはならない事はあるまい。

余談はさておき、この書物の一章にアインシュタインの教育に関する意見を紹介論評したものがある。これは多くの人に色々な意味で色々な向きの興味があると思われるから、その中から若干の要点だけをここに紹介したいと思う。アインシュタイン自身の言葉として出ている部分はなるべく忠実に訳するつもりである。これに対する著者の論議はわざと大部分を省略するが、しかし彼の面目を伝える種類の記事は保存することにする。

アインシュタインは注5ヘルムホルツなどと反対で講義のうまい型の学者である。のみならず講義講演によって人に教えるという事に興味と熱心をもっているそうである。それで学生や学者に対してのみならず、一般人の知識慾よくを満足させる事を煩わしく思わない。例えば労働者の集団に対しても、分りやすい講演をやって聞かせるとある。そんな風であるから、ともかくも彼が教育という事に無関心Cな仙人肌でない事は想像される。

アインシュタインの考えでは、若い人の自然現象に関するイドウサツの眼を開けるといふ事が最も大切な事であるから、従って実科教育を十分に与えるために、古典的な語学のみならず「遠慮なく云えば」語学の教育などは幾分ウギセイにしても惜しくないという考えらしい。

これについて持出もちだされた 注6 So viele Sprachen einer versteht, so viele Male ist er

Mensch. というカール五世の言葉に対して彼は、「語学競技者」^{シユプラハ・アトレーテン}は必ずしも「人間」の先頭に立つものではない、強い性格者であり認識の促進者たるべき人の多面性は語学知識の広い事ではなくて、むしろそんなものの記憶のために偏頗^{へんぱ}に頭脳を使わないで、頭の中を開放しておく事にある、と云っている。

「人間は『鋭敏に反応する』(subtil zu reagieren) ように教育されなければならない。云わば『精神的の筋肉』(geistige Muskeln) を得てこれを養成しなければならない。それがためには語学の訓練^{ドリル}はあまり適しない。それよりは b ような修練に重きを置いた一般的教育が有効である。」

「尤^{もつて}も生徒の個性的傾向は無論考えなければならない。通例そのような傾向は、かなり早くから現われるものである。それだから自分の案では、中等学校^{ギムナジウム}の三年頃からそれぞれの方面に分派させるがいいと思う。その前に教える事は極めて基礎的などころだけを、偏しい骨の折れない程度に止めた^{とて}方がいい。それでもし生徒が文学的の傾向があるなら、それにはラテン、^{註ア}ギリキも十分にやらせて、その代り^{かわエ}シヨウに合わない学科でいじめるのは止^よした方がいい……」

これは明らかに数学などを指したものである。数学嫌いの生徒は日本に限らないと見えて、モスコフスキーの云うところに拠^よると、かなりはしっこい頭でありながら、数学にかけてはまるで低能で、学校生活中に襲われた数学の悪夢に生涯取り付かれてうなされる人が多いらしい。このいわゆる数学的低能者についてアインシュタインは次のような事を云っ

ている。

「数学嫌いの原因が果^{はた}して生徒の無能にのみよるかどうだか私にはよく分らない。むしろ私は多くの場合にその責任が教師の無能にあるような気がする。大概の教師はいろんな下らない問題を生徒にしかけて時間を空費している。生徒が知らない事を無理に聞いている。本当の疑問のしかけ方は、相手が知っているか、あるいは知り得る事を聞き出す事ではなければならぬ。それで、こういう罪過の行われるところでは大概教師の方が主な咎^{とが}を蒙^{こうむ}らなければならぬ。学級の出来栄えは教師の能力の尺度になる。一体学級の出来栄えには自ずから一定の平均値があつてその上下に若干の出入りがある。その平均が得られれば、それだからかなり結構な訳である。しかしもしある学級の進歩が平均以下であるという場合には、悪い学年だというより、むしろ先生が悪いと云つた方がいい。大抵^{たいてい}の場合に教師は必要な事項はよく理解もし、また教材として自由にこなすだけの力はある。しかしそれを面白くする力がない。これがほとんどいつでも禍^{わざわい}の源になるのである。先生が退屈^{いき}の呼吸を吹きかけた日には生徒はチツク^オしてしまふ。教える能力というのは面白く教える事である。どんな抽象的な教材でも、それが生徒^Dの心の琴線に共鳴^{おこ}を起させるようにし、好奇心をいつも活^いかしておかねばならぬ。」

これは多数の人にとって耳の痛い話である。

(寺田寅彦『アインシュタインの教育観』による)

(注)

- 1 アインシュタイン —— 1905年に特殊相対性理論、16年に一般相対性理論を発表。20世紀最大の科学者とも称せられる。
- 2 レラチヴィテイー —— 相対(性)原理。
- 3 ボスウェル —— イギリスの弁護士。交流のあった同国の文学者を描いた伝記「サミュエル・ジョンソン伝」(1791)の著者。
- 4 エッカーマン —— ドイツの著述家。ゲーテの助手を務め、ゲーテの死後、「ゲーテとの対話」(1836〜48)を著した。
- 5 ヘルムホルツ —— 19世紀のドイツの物理学者、生理学者。
- 6 So viele Sprachen einer versteht, so viele Male ist er Mensch. —— 「言語を多く知るほど多面性のある人間になる」という意味のドイツ語。
- 7 ラテン、ギリキ —— ラテン語、ギリシア語

問1 傍線部ア〜オのカタカナを漢字に直せ。

問2 傍線部A「野良のむすこが親爺の金を誤魔化しておいて、これがレラチヴィテイだなどど済ましている」とあるが、これは何の例か。本文中から抜き出せ。

問3 a に入れるのに最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 法学者
- イ 哲学者
- ウ 神学者
- エ 理学者
- オ 文学者

問4 傍線部B「著者の論議はわざと大部分を省略する」とあるが、それはなぜか。その理由を書け。

問5 傍線部C「仙人肌」とあるが、「仙人」と反対の意味で使われている語を本文中から抜き出せ。

問6

b

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選

び、記号で答えよ。

- ア 知識を積み重ねていく
- イ 経験を重視する
- ウ 自分で物を考える
- エ 身体を鍛える
- オ 反射的に反応できる

問7 傍線部D「生徒の心の琴線に共鳴を起させる」とあるが、どういう意味か。説明せよ。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

日本ロケット開発の父、故糸川英夫博士は、敗戦から数カ月間に人生最大のピンチを迎えていた。戦時中、「隼」^{はやぶさ}など戦闘機の設計に携わ^アってきた糸川さんの周^イりから A が引くように人が去っていった。

代わりに押し寄せてきたのが、それまでの開発費用の請求書である。陸軍航空本部に掛け合っても、担当者は逃げ回るばかり。結局、家財道具をすべて売って支払った。GHQからは航空機の研究を一切禁止される。自殺を考える日々だった。

仕方なく脳波や音響工学の研究に取り組んだ。ブランクを経て、国産初の固体燃料ロケット「ペンシルロケット」の開発、実験に成功したのが昭和30年である。その後の宇宙開発は、糸川さんの弟子や孫弟子たちが担^ウってきた。

ペンシルロケットの成功から50年後、小惑星探査機「はやぶさ」が糸川さんにちなんで命名された小惑星「イトカワ」に着陸したのも、輝かしい成果の一つである。 B 今回は大きな挫折^エを味わうことになった。

次世代大型ロケット「H3」の打ち上げ失敗である。昨年10月の小型固体燃料ロケット「イプシロン」6号機に続く打ち上げの失敗となった。 C を呈する宇宙ビジネス

への参入に、ブレーキがかかったのは否^オめない。お家芸^aだった「ものづくり」の危機を知つたら、糸川さんは何というだろうか。

D

糸川さんのチームも常に成功してきたわけではない。すぐ近くの海中にロケットが落下した際のエピソードである。「水しぶきが上がったのは、空中分解したからではないか」。記者に聞かれた糸川さんが「あれはイルカですよ」とけむ^bに巻いたこともあった。「人生で大切なのは失敗の歴史」との名言も残す。H3のスタッフの捲土^c重来^{けんど}に期待する。

(二〇二三年三月九日付産経新聞朝刊『産経抄』による)

問1 傍線部ア～オの漢字の読み仮名を書け。

問2

A

に適切な言葉を入れよ。

問3

B

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で

答えよ。

- ア したがって
- イ もつとも
- ウ その結果
- エ というわけで
- オ さらに

問 4

C

えよ。

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答

- ア 活況
- イ 好評
- ウ 苦言
- エ 疑問
- オ 様相

問 5

D

答えよ。

に入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で

- ア なぜなら
- イ それゆえ
- ウ 逆に
- エ しかも
- オ とはいえ

問 6 傍線部 a「お家芸」、傍線部 b「けむに巻いた」、傍線部 c「捲土重来」の意味を書け。

第3問 ①～⑩の慣用句や表現の誤りを正しく直せ。(漢字、仮名書きどちらでも可)

① 怒り心頭に達する ↓ 怒り心頭に

② 枯れ木も花のにぎわい ↓ 枯れ木も

のにぎわい

③ 気が置ける親友 ↓

親友

④ 白羽の矢が当たる ↓ 白羽の矢が

⑤ 深みに溺れる ↓ 深みに

(深入りし過ぎて抜け出せなくなる)

⑥ キャスティングボードを握る ↓

を握る (どちらになるか決

まらないときに、それを決定する力を持つ)

⑦ 出るくぎは打たれる ↓ 出る

は打たれる

⑧ 合の手を打つ ↓ 合いの手を

⑨ 取り付く暇もない ↓ 取り付く

もない

⑩ 的を得た発言 ↓ 的を

発言